【原　　著】

幼児の身体障害への理解を援助する絵本教材

浅野　泰昌　山口（西岡）由稀　馬場　訓子

Children's Books as Teaching Material that Help Preschoolers Gain Understanding of Physical Disabilities

ASANO Yasumasa, YAMAGUCHI (NISHIOKA) Yuki, BABA Noriko

2023
岡山大学教師教育開発センター紀要　第13号　別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.13, March 2023

岡山大学教師教育開発センター紀要，第 13 号（2023），pp.389 － 403

【研究ノート】

原　著

幼児の身体障害への理解を援助する絵本教材

浅野泰昌※1　山口（西岡）由稀※2　馬場訓子※3

本論は，身体障害を扱う絵本に焦点を当て，幼児期における障害理解を援助する絵本を収集及び分析し，絵本リストを作成すると同時に，それらの絵本の学びの要素や保育者の留意事項等について考察するものである。その結果，身体障害に関する絵本は，情緒的な理解の促進を目指したもの，盲導犬や車椅子等の障害児・者の生活を補助するものに関する知識の習得に重点が置かれたもの，その両方等，作者の思想や意図によって多種多様なものが存在することが分かった。それらを有効に活用するために保育者は，絵本に込められた学びの要素を読み取り，障害理解教育のねらいに合わせて適切な絵本を選択し，幼児の日常生活に般化されるように提示することが求められる。今後の課題は，リストを基にした現場実践から事例を収集し教育効果を分析すること，障害理解絵本が新たに出版される場合はその内容を吟味し，リストを随時更新して一層の実用化を図ること，が挙げられた。

キーワード：幼児期，障害理解教育，身体障害，絵本，保育者

※1　倉敷市立短期大学
※2　御南認定こども園
※3　岡山大学学術研究院教育学域

Ⅰ　障害理解教育における絵本の有用性と絵本リストの必要性

本研究は，幼児の障害理解を援助する教材として絵本を取り上げ，その教育的妥当性を検証するものである。第１報においては，幼児期における障害理解教育の意義や内容を検討し，幼児にとって身近な文化財である絵本の有用性及び妥当性について述べると共に，課題を明確化した。

幼児に障害理解を促すためには，障害を主題とした絵本を単に読み聞かせるだけでは不十分であり，「障害理解指導に有効な教材，教具を用いれば，誰もが障害理解指導を有効に行うことができるのではなく，その教材，教具を適切に使用することが必要不可欠になる」(1)と指摘されている。絵本を活用した障害理解教育における保育者の役割としては，絵本の内容を深く理解し，指導のねらいに合わせて適切な絵本を選択することや，幼児の疑問を想定し，絵本という備えをもって柔軟に回答できるようにすることが考えられる。その役割を果たし，教育効果を上げるためには，絵本を円滑に選択できる状況が必要である。そこで，第２報である本論は，身体障害を扱う絵本に焦点を当て，幼児期における身体障害理解を援助する絵本のリストを作成すると同時に，それらの絵本の学びの要素や保育者の留意事項等について考察する。

Ⅱ　身体障害を主題にした絵本の調査

1　調査対象

本研究においては，岡山県立図書館及び岡山市立図書館が収蔵している絵本を調査の対象とする。絵本の収集範囲を公立図書館に定めた理由は次の通りである。第一に，公立図書館には資料収集方針があり，蔵書は一定の基準を満たしているため信頼がおける。例えば，岡山市立図書館の資料収集方針においては，内容や表現だけでなく装丁や造本に至るまで 13 項目の基準が示されている[(2)]。第二に，最終的に作成された絵本リストで紹介する絵本は，誰でも気軽に探し求めて，手に取って読める必要がある。その場所としても，一定の収蔵図書を有し，利用者数の多い公立図書館は最適である。中でも岡山市に所在する岡山県立図書館は，現在，298,146 冊の児童資料の収蔵能力を備えている[(3)]。

2　絵本の選定と分析の手続き

まず，絵本ガイド等を参考にしながら，障害に関する絵本の情報を幅広く収集し，幼児期にふさわしいものを絞った。これに際し，幼児期に相応しい絵本を選別するために，対象年齢，漢字や振り仮名の有無や難易度，ページ数，文章量等を判断基準とした。次に，その中で岡山市内の公立図書館に収蔵されている絵本に目を通し，さらに絵本を絞り込んだ。その上で，絞り込んだ絵本を，障害理解指導のねらいや内容に応じて項目を設定しつつ分類し，リストには，「書名」「作者」「出版社」「出版年」の他に，次のような情報を掲載した。指導の目的に沿った絵本を選択しやすいように，「盲導犬の訓練」「点字・触って楽しむ」等，内容を簡単に示した。また，写真で構成されている場合には「写真」，実話と創作の物語の区別は「実話」「創作」，実話や実在の人物を基にした創作の物語である場合は「半創作」と示した。さらに，「大凡のサイズ」「ページ数」の他に，漢字が使われている場合には「漢字」と示すことで，集団での読み聞かせや発達過程に適しているかどうか，保育者が判断する際の参考になるようにした。なお，このリストは本論末尾に資料として掲載した。最後に，各項目の代表的な絵本の内容を分析することで，それらの絵本の教育効果や幼児への影響を考察した。

ここで，本論における身体障害の範囲を示す。『身体障害者福祉法』[(4)]によれば，身体障害者とは，「別表に掲げる身体上の障害がある十八歳以上の者であつて，都道府県知事から身体障害者手帳の交付を受けたものをいう」と定められている。また，同資料の別表を参照すると，「①視覚障害②聴覚又は平衡機能の障害③音声機能，言語機能又はそしゃく機能の障害④肢体不自由⑤心臓，じん臓若しくは呼吸器又はぼうこう若しくは直腸，小腸，ヒト免疫不全ウイルスによる免疫若しくは肝臓の機能の障害」の５つに大きく分けられている。これに加えて，複数の障害を重複している身体障害者もいる。絵本に登場する身体障害の種類を前述の基準ほど詳細に分類することは難しいため，本論では「①視覚障害②聴覚障害③肢体不自由④その他の身体障害」の４つに分ける。なお，

肢体不自由には，脳性麻痺等，歩行に関わる障害を含めて，絵本を分類するための基準とする。

Ⅲ　身体障害への理解を援助する絵本と指導の留意点

１　身体障害について知るきっかけとなる絵本

前述の調査において，特定の障害に焦点を当てていないものの，障害について触れられている絵本が確認された。これらの絵本を読み聞かせることで，幼児が障害者の存在に気付く，または，関心を持つきっかけになる可能性がある。

例えば，『てとてとてとて』（資料１-③）（以降，本文中に取り上げる絵本に，本論末尾の資料に対応した番号を書き添える。なお，資料は出版年順に絵本を一覧化しており，本文中の資料番号は前後する。）と『ぼくの手わたしの手』（資料１-⑦）では，手には様々な機能があること説明する中で，その一つの機能として，手話や点字が紹介されている。絵本全体からすると，障害に触れたページは少ないが，端的に紹介されているため，「話す手」「よむ手」とは，どのようなものかと興味をもつ幼児もいると想定される。

『チコときんいろのつばさ』（資料１-④）は，『スイミーちいさなかしこいさかなのはなし』等で知られるレオ・レオーニの作品である。作者は，特定の障害を描くのではなく，「翼を持たない鳥」という比喩表現を用いて，「自分らしさの確立と受容」について描き出している。身体的特徴に関する物語を，障害の有無に関わらず全ての人に通じる主題に広げて描いた普遍性の高い作品であり，その描写の美しさも併せて，幼児への読み聞かせに適したものと言える。

２　視覚障害への理解を援助する絵本

（１）盲導犬について紹介する絵本

盲導犬は，視覚障害者を支援するための訓練を受けた犬であり，視覚障害の理解には欠かすことができない。望月ほか(1994)の研究により，「幼児期において既に視覚障害者および盲導犬の存在とその役割に関する認識の萌芽が認められ，特にその発達は年中児から年長児において顕著であること」[(5)]が明らかにされている。盲導犬に関する絵本は多数あり，教材化の幅は広いと考えられる。

連続した絵本である『ベルナの目はななえさんの目』等（資料２-④，⑦～⑪）は，盲導犬である「ベルナ」が，ある家庭で暮らし始めてから亡くなるまでの生活が描かれている。これらの絵本に登場する「みきたくん」は，幼児と同世代であることから，幼児にとっては登場人物の成長を自分のことのように感じ，共感しやすいと考えられる。絵本の中では，盲導犬の役割についても触れられており，連続する物語の中で幼児が盲導犬についての知識を広げ，理解を深めることができる。この他にも，2000 年以降，盲導犬との生活に視点を当てた絵本は多く描かれている。望月ほか(1994)は，「盲導犬およびその使用者に対するエチケットや盲導犬が果たす役割について言及しているものは少ない」[(6)]ことを指摘しているが，時代を経るにつれてその必要性が理解され，徐々に改善さ

れていることが分かる。

一方,『もうどうけんドリーナ』(資料２-①)や『クイールはもうどう犬になった』（資料２-②）では，写真を使って，盲導犬の訓練の様子が詳しく描かれている。どちらも冒頭には子犬時代の写真が使われており,成長の様子が分かる。そして，それぞれ「くんれんもごうかく」「くんれんはそつぎょうです」と書かれていることから，盲導犬は，特別な訓練を受けている犬だということも伝わる。これらの実話が基になっている作品に対し,『もしもぼくがいぬのがっこうにいったら』（資料２-③）は，低年齢児に分かりやすい絵本である。この絵本のよさは，平凡な生活をしている「のんびりいぬくん」が，盲導犬の訓練所に行って失敗をするというユーモアのある物語の中で，さり気なく盲導犬の訓練について伝えていることである。盲導犬の訓練について初めて知る場合には，このような絵本を活用して予備知識を提供するとよい。

盲導犬使用者は，どのようなことを幼児に理解して欲しいと期待しているのだろうか。石上ほか(2002)は，①盲導犬に勝手にさわってはいけないこと，②盲導犬は視覚障害者の歩行の手伝いをする犬であること，③盲導犬に食べ物をあげてはいけないこと，④盲導犬を見て大きな声を出して近づいてはいけないこと，⑤盲導犬をこわがらなくても大丈夫であること，を挙げている[(7)]。これらのことを分かりやすく幼児に伝える方法として絵本を活用することが考えられる。その一例として『もうどう犬リーとわんぱく犬サン』（資料２-⑱）がある。盲導犬リーと対比するようにわんぱく犬サンも登場し，交互にその様子が描かれる中で，幼児がその対比を楽しみながら，普通のペットとしての犬との違いを認識できるように工夫されている。ただし，盲導犬の優秀さを強調する余り，誤解を招きかねない点もあるため，読み聞かせの際には気を付けなくてはならない。先行研究においても,「おりこう」「かわいそう」「人間を支える」等,「盲導犬を美化する傾向が認められた」と報告されている[(8)]。盲導犬が飼い主を連れて歩いているのではなく，飼い主の声掛けが必要であることを，登場人物の台詞を通して伝えることが望まれる。

（２）点字について紹介する絵本

点字を初めて見た幼児は，これは何かと疑問をもつことが予想される。『見えなくてもだいじょうぶ？』（資料２-⑬）では,「…点が６つあって、その組み合わせで字ができているんだ。目が不自由な人は、目ではなくて、指で字を読むんだよ」と端的に説明されており，そのような幼児の疑問を解決してくれる。

点字の学習に重点を置いているわけではなく，遊びながら点字の存在に気付くことのできる絵本もある。例えば,『てんじつきえほんさわるめいろ』（資料２-⑳）は,幼児にとって身近な迷路遊びを,点字に触れながら楽しめる。また,『〈新装版〉これ、なあに？』(資料２-⑮）では,「ザラザラくん」「ポツポツちゃん」等，触感を擬音で表した登場人物が出てくるため，それぞれの触り心地をイメージすることができる。触覚を頼りにして形を認識するということの理解に繋がる可能性がある。また，触ることができる絵本は，視覚障害者だけでなく低年齢児の楽しみ方にも適し，その後の視覚障害者に対する理解を円滑にす

る原体験を提供する可能性がある。

『てんじつきさわるえほんノンタンじどうしゃぶっぶー』（資料２-⑲）のように，既存の絵本に点訳が付いている絵本も存在する。馴染みのあるキャラクターが登場する絵本は幼児に受け入れられやすい。

（３）視覚障害者の生活について紹介する絵本

『みえないってどんなこと？』（資料２-⑥）は，アイマスク体験の様子を写真に撮り，それらに状況を説明する文章が付けられている。この絵本のよさは，見えない状態を体験者の心情を描写しながら具体的に伝えていることである。見えない状態の想像に終わらず，目が見えなくても聴覚や嗅覚を使って，色々なことができるということが伝わる。

バリアフリーについて触れる『見えなくてもだいじょうぶ？』（資料２-⑬）は，点字ブロックや白杖等，視覚障害者の生活を支えるものが描かれている。絵本で気づきを促し，日常生活においても関心がもてるようにするのがよい。絵本での体験が実体験と結びついてこそ，幼児にとって印象的なものになる。

３　聴覚障害への理解を援助する絵本

（１）聴覚障害者と周囲の人の心情を紹介する絵本

聴覚障害者の場合，外見だけでは分かりにくいこともあり，社会生活の中で誤解を受けることもある。『14 の心をきいて』（資料３-⑪）の中では，周囲の人の冷酷な態度に悩む場面が多く描かれ，主人公の悔しい心情が記されている。他方，それとは対称的に，『アイのことばのコップ』（資料３-⑬）は言葉を発しにくい「アイ」を見守る周囲の人々の思いが描かれた穏やかな物語である。これらの描写は現実社会における障害者への態度を少なからず反映しており，障害者に対する望ましい態度について考えるきっかけとなるだろう。

『わたしたち手で話します』（資料３-㉑）は，最初は主人公との関わり方が分からず，冷たい態度を取っていた仲間が変わっていく様子が描かれている。手話ができる友達の「トーマス」の登場により，聴覚障害者への交友的な関わり方の例が示されている。聴覚障害者と接する際に重要なこととして，「まず，肩を叩いたり，聴覚障害者の視界に入るように手を振ったりして合図をし，お互い向き合ってから話しかけること」[9]が挙げられている。この絵本では，まさにその様子が描かれている。どのように接することが望ましいかを，具体的に示されれば分かりやすく，実践に移しやすい。

（２）手話に関する絵本

手話は，手や指の動きや顔の表情等によって意思疎通を行う視覚的な言語であり，手話歌等を通じて幼児が接する場面も見られる。『てではなそう』シリーズ（資料３-⑤～⑩）は，手話に対する幼児の興味関心に応えてくれる。サイズが小さく，ページ数が多いため，集団での読み聞かせには向かないが，平仮名と片仮名のみで書かれているため，一人でも友達とも家族とも一緒に手話に親しみ，音声的な言語によらない意思疎通の在り方を体験できる。

『音のない川』（資料３-③）には，他の絵本にはない特徴があり，手話で読

み聞かせることができる。それは幼児にとって非日常的な経験になるため，印象に残りやすいと考えられる。絵と手話の両方の視覚的要素に意識が分けられ，注意が散漫になる危険性があるため，できるだけゆっくりと時間をかけて読み聞かせるのが望ましい。幼児の中には，保育者が絵本を横に置き，手話をする様子に，自分もやってみたいと思う幼児もいる可能性がある。

（３）手話以外の意思疎通の方法を紹介する絵本

口話は，聴覚障害者が相手の唇の動きを読み取りながら話の内容を理解し，自らも音声言語を使うことで会話をする方法である。望ましい口話の方法については，『14 の心をきいて』（資料３-⑪）や『ぼくのだいじなあおいふね』（資料３-②）等が参考になる。家族や知り合い，通訳者が居る場合も「本人に関することは直接本人に対して話しかけるのがマナーであること」[10]を忘れてはならない。意思疎通を図る方法は手話や口話だけでなく，身振り，空書，絵や写真も活用することができる。『わたしたち手で話します』（資料３-㉑）では，手話のできる人を介さず，聴覚障害者の「リーザ」に直接質問する場面が描かれている。また，「…大きい声で話したいときは、手を大きく動かすのよ」「にっこりしたり、目を大きくあけたり、うなずいたりすると、よく話がつたわるんだよ」と，表情の付け方についても知ることができる。音声以外で表情を付ける交流は，反対に音声に頼った交流よりも充実する場合がある。幼児がその特徴に気付くことができればよい。

（４）聴覚を補う手段を紹介する絵本

補聴器は，幼児にとって珍しく馴染みのないものであるため，聴覚障害者にとって補聴器が重要なものであることを，幼児が理解できるように伝える必要がある。『ローラのすてきな耳』（資料３-㉓）の物語の前半では，聴覚障害者の困難さに焦点が当てられているが，後半では，補聴器を装着した主人公の生活が変化する様子を描くことで補聴器の有用性が説明されている。同時に，補聴器の扱いの難しさや補聴器を装着しても明瞭に聞こえるわけではないという事実を説明している。この絵本は補聴器について多面的かつ正確に教えてくれる。

補聴器の他にも，聴覚を補うものは多数ある。ドアのベル，電話，目覚まし時計等，音を聞き取らなくてはならない道具をどのように置き換えるのかという素朴な疑問を解決してくれるのが，『わたしたち手で話します』（資料３-㉑）である。この絵本では，音の代わりに光や振動を使った製品によって生活や交流ができることを描いている。

４　肢体不自由への理解を援助する絵本

（１）肢体不自由者の移動方法について紹介する絵本

怪我や病気による一時的な使用と，障害による長期的な使用の区別は，幼児にとって難しい場合がある。そのため，肢体不自由者への理解を深めるためには，絵本の登場人物を介して，長期的に車椅子を使用する人がいることに気づけるように説明する必要がある。また，肢体不自由者の移動手段は車椅子だけではない。『ちえちゃんの卒業式』（資料４-⑦）では，車椅子以外の移動や歩行

の補助具に気付くことができる。具体的には，脚を支える器具，ウォーカー，乗れるように工夫された自転車，手押し車，クラッチ等を写真で見ることができ，それらの補装具を使用する様子が分かりやすいのがよさである。

（２）脳性麻痺の永続性と状態について紹介する絵本

車椅子使用者に対する幼児の認識からも分かるように，障害の永続性は幼児にとって理解の困難な事柄である。しかし，『あいちゃんのそら』（資料４-⑭）は，「あいちゃんはびょうきで、いちどもじぶんのあしであるいたことがありません」という文章から物語が始まり，「あいちゃんのすむせかいが、いつもすてきでありますように」という文章で締め括られている。また，『ノエルのおさんぽ』（資料４-⑧）では，おばあちゃんになっても一緒に歩こうという物語の流れにより，障害の永続性が表現されている。

障害の状態についての描写が詳しい『あつおのぼうけん』（資料４-③）では，「しゃべるのも、そうや。わかるようにしゃべろうとすると、よけい口がうごかへんようになるんや」と書かれており，脳性麻痺のために流暢な発語が困難であることが説明されている。また，「あつお」の「手をうごかそうとおもたら，足がうごいたり、足をうごかそうとおもたら，手がうごいたりするんや」等という言葉によって，身体を動かすことの困難さが表現されている。この絵本を読み聞かせることにより，幼児は，思い通りに動きにくい身体をもつ人の存在に気付くことができる。『おとうさんといっしょに』（資料４-④）は，麻痺についてより詳しく教えてくれる。生活の様子，屋外を移動する際の危険，家族の気持ち等，様々な要素が含まれた絵本である。

（３）肢体不自由者への関わり方を紹介する絵本

『あつおのぼうけん』（資料４-③）は，教材として充実した作品である。この絵本のよさは，冒険をする中で，主人公の「あつお」も友人の「なみた」も，あつおの苦手なことを理解しており，自然と手助けをしている場面があることである。なみたが手助けをする前には，必ずあつおの求めがある。それに対して「ほな、おれがとったげるわ」「しょうがないなあ、ほら、きいな」と，なみたが応じる。障害者がいつも困っているとは限らず，理解に基づかない不必要な援助は，当事者にとって迷惑となる場合がある。そのようなことを避けるためにも，これらの絵本を読み聞かせることは重要な意味をもっていると考えられる。

また，障害者がいつも助けられる存在ではない相互扶助の関係にあることを教えてくれる絵本もある。『バースデーケーキができたよ！』（資料４-⑩）は，母親のために姉妹でケーキを作る物語である。その中で，車椅子を使用する妹のために，姉が高いところにあるものを取る場面や，妹が姉のためにエプロンの紐を結ぶ場面が描かれており，１人ではできないことを補い合う様子が分かる。その意味では，お手伝いでおつかいに出かける『わたしの足は車いす』（資料４-⑫）の設定も同様に，お互いに助け合う精神を幼児に教えてくれる。

富樫ほか(2001)の研究によると，「車いす使用者の約９割が外出中に子どもから好奇のまなざしで見られた経験がある」[11]と言う。たいていの場合，その行

為自体を肢体不自由者が不快に思うことはない。それは，幼児は違いを良くも悪くも感じておらず，不思議に思い，興味をもっているだけだと分かるからである。幼児がどこかに違いを感じているのに対して，「みんな同じ」と一括りに強調すると，理解が歪む可能性がある。しかし，どこが違ってどこが同じなのか分かれば，素直な理解に繋がると考えられる。『わたしの足は車いす』は多様な読み方のできる絵本で，違いに対する幼児の認識にも触れている。この絵本では，「ぼくたち，ちょっとだけふつうとはちがうんだよ。だけど，ちがっていてもいいのさ。ちがってるのって，ほんとうは，とくべつなことなんだから」と素朴に書かれているが，この言葉によって，違いを不思議に思っていても，自然と納得する幼児もいると期待できる。

一方，健常者との違いを全面に出すのではなく，同じところが強調されている絵本もある。『スーザンはね…』（資料４-⑨）は，最後の１ページまで，主人公の「スーザン」が車椅子を使用していることが分からないように描かれている。笑うこと，唄うこと，絵を描くこと，それぞれの場面で元気いっぱいに，いたずらっぽく遊びを楽しむ様子は面白く，幼児にも共感されやすい絵本であると考えられる。そして，自分達と同じような楽しみを知っているスーザンが，実は車椅子を使用していたというように締め括られている。

（４）絵本の中で背景の一部として車椅子使用者が描かれている絵本

『もうどうけんふりふりとまり』（資料２-⑰）は，視覚障害者について描いた絵本であるが，海水浴の場面において，台詞はないものの，車椅子を使用する人が物語の背景として描かれている。車椅子使用者は，見た目に障害が分かりやすいため，このような描かれ方をされることもある。障害者に見慣れることが障害理解教育にとって重要であるとの指摘がある[(12)]。その意味では，障害者が主題となっていなくても，背景に描かれる作品も貴重であると言える。

５　その他の身体障害への理解を援助する絵本

先天性四肢欠陥，口唇裂，海綿状血管腫等は，見た目に分かりやすいため，自分自身でも疑問をもつことが多いと予想される障害である。絵本の中でも，そのような設定で描かれている。『さっちゃんのまほうのて』(資料５-①)では，「さっちゃん」が手の指がないことを理由に，おままごとでお母さん役をできないと言われ，幼稚園に行けなくなる場面がある。『チーちゃんのくち』（資料５-②）では，「チーちゃん」が，憧れの「ともみ」と自分の顔を比べることで違いに気づき，不思議に思うという設定である。『てるちゃんのかお』（資料５-③）では，周囲の人が「てるちゃん」の顔をじろじろ見ることがきっかけとなり，自分の顔を不思議に思うようになる。３冊の絵本に共通していることは，主人公が自分の容姿に疑問をもちながらも，温かい言葉掛けや励まし，周囲の理解や本人の努力により，最終的には乗り越えている点である。障害者が精神的に強い存在，頑張る存在であることを過度に強調するのは誤解を生むため避けるべきであることに留意しつつ，それぞれが大切な存在であることが伝われることが望ましい。

Ⅳ　総括と今後の課題

障害に関する絵本は，情緒的な理解の促進を目指したもの，車椅子等の補助具に関する知識の習得に重点が置かれたもの，その両方等，作者の思想や意図によって多種多様なものが存在することが分かった。今回，調査した範囲では，視覚障害についての絵本では，盲導犬に関するものが多かった。その一方で，聴覚障害についての絵本では，手話の学習に関するものは独立に存在しており，心情を描写した絵本も比較的多かった。肢体不自由については，健常者との違いと類似点に焦点を当てた絵本が多かった。

そして，絵本の中には，障害者に対して冷酷な態度を示す登場人物もいた。好ましくない態度を絵本で示し，「このようにしてはならない」と幼児に伝えるのが最善の方法であるとは言えないが，幼児は特定の状況を基にする方が物事の良し悪しを判断しやすい。その観点においては，障害者の登場人物の困っている様子を絵と言葉で具体的に示すことは有効な方法であると考えられる。この提示の在り方の効果と影響については，今後，慎重に議論を重ねる必要がある。他方，絵本に登場する障害者はキャラクターとして印象的に描かれることが多い。できることを強調する場面が頻繁にあるため，障害者の能力の過大評価に繋がる危険性もある。読み聞かせの際，過大評価等の誤解をしているような言動が幼児に見られた場合は，保育者が補助的な説明をし，誤解が広がらないように配慮する必要がある。

障害理解教育において重要なのは，日常生活への般化である。特に，補助具が記されている場合や関わりの要点がまとめられている場合は，幼児の興味関心を引き出しやすく応答形式で幼児に問うことが考えられる。また，「見たことがある」「知っている」という経験は，幼児の今後の障害理解を支える土台になると十分に考えられる。例えば，絵本を通して点字についての予備知識を得ることは，階段の手摺りやエレベーターのボタン等，町の中にある点字にも関心を向ける契機になる。社会の中で実際に使われている点字に興味をもち，視覚障害への関心に繋がれば，障害理解教育の第一段階の達成に資する。

また，障害のある子ども一人一人に応じた障害理解指導が求められるため、それぞれの実態に即した絵本を選ぶ必要がある。保育者や保護者が障害のある幼児や所属する学級の実態に合わせて柔軟に絵本を製作することも，障害理解教育の一手段として検討できる。

絵本リストに取り上げた絵本は，どれも重要なことを幼児に教えてくれる。保育者は，障害理解教育のねらいに合わせて，例えば，情緒的な理解を求めるのであれば幼児が親しみやすい絵で描かれているものを，知識の習得のためには具体的でより写実的な絵や写真で描かれているものを等，視覚的要素や言葉選びも考慮して絵本を選ぶとよい。絵本を有効に活用するためには，それぞれの絵本の中に込められた学びの要素に保育者が気付くことが大切である。そして，読み聞かせをする前に，絵本を読み込み，誤解が生じそうな場面はないか

等，確認しておくことが大切である。

本論では，身体障害への理解を援助する絵本リストを作成し，それらの絵本の学びの要素や保育者の留意事項等について考察することに留まった。今後は，実際の保育現場で幼児に読み聞かせ，教育の効果を確認して，事例を収集する必要がある。また，障害者が使用する補助具は常に進化している。これらに合わせて絵本の内容も発展するのが望ましい。多様性を重視する時代にあって，障害理解に結び付く絵本は，身体障害を主題としたものに関わらず，今後も増えることが予測される。それに伴って，新たな絵本の内容を吟味・検討し、必要に応じて絵本リストを随時更新し，より実用的なものにする必要がある。

資料１．身体障害について知るきっかけとなる絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容
①『ポケットのないカンガルー』	エミイ・ペイン／作，H・A・レイ／絵，西内ミナミ／訳	偕成社	1970 年	肢体 29×24／32 頁 創作・漢字
②『どんなかんじかなあ』	中山千夏／作，和田誠／絵	自由国民社	2005 年	視覚・聴覚・肢体 27×20／32 頁 半創作
③『てとてとてとて』	浜田桂子／文・絵	福音館書店	2008 年	点字・手話の紹介 26×23／28 頁 創作
④『チコときんいろのつばさ』	レオ・レオーニ／作・絵，さくまゆみこ／訳	あすなろ書房	2008 年	肢体 23×18／32 頁 創作
⑤『みんながつかうたてものだから』	サジヒロミ／作	偕成社	2010 年	ユニバーサルデザイン 24×19／32 頁 半創作
⑥『妖怪バリャーをやっつけろ!―きりふだは、障害の社会モデル』	三島亜紀子／文，みしまえつこ／作，平下耕三／監修	生活書院	2010 年	バリアフリー啓蒙 22×22／56 頁 創作・漢字
⑦『ぼくの手わたしの手』	中川ひろたか／作，斉藤美春／写真	保育社	2013 年	点字・手話の紹介 24×21／24 頁 創作
⑧『えほん障害者権利条約』	ふじいかつのり／作，里圭／絵	株式会社汐文社	2015 年	条約の解説 25×22／32 頁 半創作・漢字
⑨『みえるとかみえないとか』	ヨシタケシンスケ／作，伊藤亜紗／相談	アリス館	2018 年	障害者理解 26×20／36 頁 創作・漢字

資料２．視覚障害への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容及び備考
①『もうどうけんドリーナ』	土田ヒロミ／文・絵，日柴喜均三／監修	福音館書店	1986 年	盲導犬の訓練 25×23／28 頁 写真・実話
②『クイールはもうどう犬になった』	こわせたまみ／作，秋元良平／写真	ひさかたチャイルド	1992 年	盲導犬の訓練 23×21／39 頁 写真・実話・漢字
③『もしもぼくがいぬのがっこうにいったら』	きたやまようこ／作	小学館	1995 年	盲導犬の訓練 27×21／31 頁 創作
④『ベルナの目はななえさんの目』	郡司ななえ／作・絵，織茂恭子／作・絵	童心社	1996 年	盲導犬との生活 20×27／35 頁 半創作
⑤『点字どうぶつえん』	菊池清／絵	同友館	2000 年	点字の学習 19×27／39 頁

⑥『みえないってどんなこと？』	星川ひろこ／写真・文	岩崎書店	2002 年	創作 アイマスク体験 24×22／31 頁
⑦『ベルナのおねえさんきねんび』	郡司ななえ／作，日高康志／絵	ハート出版	2002 年	写真・実話 盲導犬との生活 27×19／31 頁
⑧『ベルナもほいくえんにいくよ』	郡司ななえ／作，日高康志／絵	ハート出版	2002 年	半創作 盲導犬との生活 27×19／31 頁
⑨『ベルナとなみだのホットケーキ』	郡司ななえ／作，日高康志／絵	ハート出版	2003 年	半創作 盲導犬との生活 27×19／31 頁
⑩『ぼくがベルナのめになるよ！』	郡司ななえ／作，日高康志／絵	ハート出版	2003 年	半創作 盲導犬との生活 27×19／31 頁
⑪『ベルナとみっつのさようなら』	郡司ななえ／作，日高康志／絵	ハート出版	2004 年	半創作 盲導犬との生活 27×19／31 頁
⑫『はじめましてチャンピイ』	日野多香子／文，福田岩緒／絵	チャイルド本社	2004 年	半創作 盲導犬の訓練 24×21／30 頁
⑬『見えなくてもだいじょうぶ？』	フランツェ・ヨーゼフ・ファイニク／作，フェレーナ・バルハウス／絵，ささきたづこ／訳	あかね書房	2005 年	実話 視覚障害者の生活 30×21／25 頁
⑭『〈新装版〉ちびまるのぼうけん』	フィリップ・ヌート／作，山内清子／訳	偕成社	2007 年	創作・漢字 点字・触って楽しむ 23×22／24 頁
⑮『〈新装版〉これ、なあに？』	ドーカス・W・ハラー／作，バージニア・A・イエンセン／作，菊島伊久栄／訳	偕成社	2007 年	創作 点字・触って楽しむ 23×22／23 頁
⑯『そっといちどだけ』	なりゆきわかこ／作，いりやまさとし／絵	ポプラ社	2009 年	創作 盲導犬の視点 21×23／39 頁
⑰『もうどうけんふりふりとまり』	セアまり／作，はまのゆか／絵	幻冬舎	2010 年	創作・漢字 盲導犬との生活 21×20／34 頁
⑱『もうどう犬リーとわんぱく犬サン』	郡司ななえ／作，城井文／絵	PHP 研究所	2012 年	半創作・漢字 盲導犬との生活 24×21／32 頁
⑲『てんじつきさわるえほんノンタンじどうしゃぶっぶー』	キヨノサチコ／作・絵	童心社	2013 年	半創作 点字・触って楽しむ 19×17／10 頁
⑳『てんじつきさわるえほんさわるめいろ』	村山純子／著	小学館	2013 年	創作 点字・触って楽しむ 25×21／10 頁
㉑『６この点　点字を発明したルイ・ブライユのおはなし』	ジェン・ブライアント／文，ボリス・クリコフ／絵，日当陽子／訳	岩崎書店	2017 年	創作 点字 29×22／34 頁
㉒『テトと親友』	たにさやか／文，やざわさわこ／絵	文芸社	2018 年	実話 視覚障害者の生活 22×16／24 頁
㉓『ぼく、アーサー』	井上こみち／文，堀川理万子／絵	アリス館	2018 年	半創作・漢字 盲導犬の視点 25×19／40 頁
㉔『ゆうこさんのルーペ』	多屋光孫／作	合同出版	2020 年	半創作・漢字 視覚障害者の生活 24×18／48 頁
㉕『カラフルデイズ―おにいちゃんはおっちょこちょい?』	しまだようこ／作	今井出版	2021 年	半創作 色覚障害 26×18／32 頁
				創作・漢字

資料３．聴覚障害への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容及び備考
①『わたしの妹は耳がきこえません』	ピーターソン／作，デボラ・レイ／絵，土井美代子／訳	偕成社	1982 年	聴覚障害者の生活 27×21／30 頁 半創作・漢字
②『ぼくのだいじなあおいふね』	ピーター・ジョーンズ／文，ディック・ブルーナ／絵，なかがわけんぞう／訳	偕成社	1986 年	補聴器の機能 25×18／22 頁 創作
③『音のない川』	サラ・バーテルス／作，キャサリン・ヒューイット／絵，松井たかし／訳	BL 出版	1998 年	手話の紹介 29×22／30 頁 創作
④『ゆいちゃんのエアメール』	星川ひろ子／写真・文	小学館	2001 年	聴覚障害者の生活 21×24／36 頁 実話・漢字
⑤『てではなそうきらきら』	さとうけいこ／作，さわだとしき／絵，米内山明宏／手話監修	小学館	2002 年	手話の紹介 27×22／24 頁 創作
⑥『てではなそう１「すき」と「なりたい」』	さとうけいこ／作，さわだとしき／絵	柏書房	2003 年	手話の学習 20×16／47 頁 手話の解説あり
⑦『てではなそう２「きもち」と「なまえ」』	さとうけいこ／作，さわだとしき／絵	柏書房	2003 年	手話の学習 20×16／53 頁 手話の解説あり
⑧『てではなそう３おはようございますみなさん』	さとうけいこ／作，さわだとしき／絵	柏書房	2003 年	手話の学習 20×16／56 頁 手話の解説あり
⑨『てではなそう４「おいしい！」』	さとうけいこ／作，さわだとしき／絵	柏書房	2004 年	手話の学習 20×16／72 頁 手話の解説あり
⑩『てではなそう５たりない！？』	さとうけいこ／作，さわだとしき／絵	柏書房	2006 年	手話の学習 20×16／77 頁 手話の解説あり
⑪『14 の心をきいて』	つちだよしはる／作・絵	PHP 研究所	2002 年	聴覚障害者の心情 24×24／32 頁 半創作・漢字
⑫『ゴンタとカンタ』	つちだよしはる／作・絵	PHP 研究所	2004 年	聴覚障害者の心情 24×24／32 頁 半創作・漢字
⑬『アイのこころのコップ』	つちだよしはる／作・絵	PHP 研究所	2005 年	聴覚障害者の心情 24×24／32 頁 半創作・漢字
⑭『まねっこあかあおきいろ』	田中ひろし／文，せべまさゆき／絵	ほるぷ社	2003 年	手話の学習 22×22／32 頁 手話の解説あり
⑮『まねっこどうぶつえん』	田中ひろし／文，せべまさゆき／絵	ほるぷ社	2003 年	手話の学習 22×22／32 頁 手話の解説あり
⑯『まねっこおてんき』	田中ひろし／文，せべまさゆき／絵	ほるぷ社	2004 年	手話の学習 22×22／32 頁 手話の解説あり
⑰『まねっこまちのひと』	田中ひろし／文，せべまさゆき／絵	ほるぷ社	2005 年	手話の学習 22×22／32 頁 手話の解説あり
⑱『ゆびであいうえお』	田中ひろし／文，せべまさゆき／絵	ほるぷ社	2005 年	手話の学習 22×22／32 頁 手話の解説あり
⑲『てですき・きらい』	田中ひろし／文，せべまさゆき／絵	ほるぷ社	2005 年	手話の学習 22×22／32 頁 手話の解説あり
⑳『親子ではじめよう！はじめての手話ブック』	谷千春／監修	講談社	2005 年	手話の学習 19×26／51 頁 手話の解説あり

㉑『わたしたち手で話します』	フランツ＝ヨーゼフ・ファイニク／作，フェレーナ・バルハウス／絵，ささきたづこ／訳	あかね書房	2006 年	聴覚障害者の生活 30×21／25 頁 創作
㉒『トーベのあたらしい耳』	トーベ・クルベリ／作，エッマ・アードボーゲ／絵，ひだにれいこ／訳	少年写真新聞社	2010 年	聴覚障害者の生活 26×21／34 頁 実話
㉓『ローラのすてきな耳』	エルフィ・ネイセ／作，エリーネ・ファンリンデハウゼ／絵，久保谷洋／訳	朝日学生新聞社	2011 年	補聴器の機能 27×23／25 頁 半創作・漢字
㉔『しゅわしゅわ村のおいしいものなーに？』	くせさなえ／作・絵	偕成社	2013 年	手話の学習 23×24／40 頁 創作・漢字
㉕『しゅわしゅわ村のどうぶつたち』	くせさなえ／作・絵	偕成社	2013 年	手話の学習 23×24／40 頁 創作・漢字
㉖『耳の聞こえないメジャーリーガーウィリアム・ホイ』	ナンシー・チャーニン／文，ジェズ・ツヤ／絵，斉藤洋／訳	光村教育図書	2016 年	聴覚障害者の生活 26×21／32 頁 実話・漢字

資料４．肢体不自由への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容
①『ゆめのおはなしきいてェなぁ』	吉村敬子／文，佐々木麻こ／絵	偕成社	1980 年	肢体不自由者の生活 22×22／42 頁 半創作
②『わたしいややねん』	吉村敬子／文，松下香住／絵	偕成社	1980 年	肢体不自由者の生活 22×16／42 頁 半創作・漢字
③『あつおのぼうけん』	田島征彦／作，吉村敬子，作	童心者	1983 年	肢体不自由者の生活 25×25／40 頁 半創作・漢字
④『おとうさんといっしょに』	白石清春／作，いまきみち／絵，西村繁雄／絵	福音館書店	1989 年	肢体不自由者の生活 27×20／32 頁 半創作
⑤『ぼくたちのコンニャク先生』	星川ひろ子／写真・文	小学館	1996 年	脳性麻痺の保育士 21×23／36 頁 実話・漢字
⑥『ぼくのおにいちゃん』	星川ひろ子／写真・文，星川治雄／写真	小学館	1997 年	肢体不自由者の生活 21×24／36 頁 実話・漢字
⑦『ちえちゃんの卒業式』	星川ひろ子／写真・文	小学館	2000 年	肢体不自由者の生活 21×24／36 頁 実話・漢字
⑧『ノエルのおさんぽ』	るりこ・デュアー／作，たかはしみちこ／絵	KADOKAWA メディアファクトリー	2001 年	肢体不自由者の生活 23×18／27 頁 半創作
⑨『スーザンはね…』	ジーン・ウィリス／文，トニー・ロス／絵，もりかわみわ／訳	評論社	2002 年	肢体不自由者の生活 24×21／28 頁 創作
⑩『バースデーケーキができたよ！』	くぼりえ／作・絵	ひさかたチャイルド	2002 年	肢体不自由者の生活 25×25／24 頁 創作
⑪『ペカンの木のぼったよ』	青木道代／作，浜田桂子／絵	福音館書店	2004 年	肢体不自由者の生活 26×19／32 頁 創作・漢字
⑫『わたしの足は車いす』	フランツ・ヨーゼフファイニク／作，フェレーナ・バルハウス／絵，ささきたづこ／訳	あかね書房	2004 年	肢体不自由者の生活 30×21／25 頁 創作・漢字
⑬『あの子はだあれ』	日野多香子／作，味戸ケイコ／絵	岩崎書店	2005 年	肢体不自由者の生活 25×20／38 頁 創作

⑭『あいちゃんのそら』	小林優華／作・絵	ひさかたチャイルド	2007 年	肢体不自由児の生活 24×24／24 頁 半創作
⑮『ちがうけれど、いっしょ』	フェリドゥン・オラル／文・絵，うえむらくみこ／訳	ワールドライブラリー	2016 年	肢体不自由者の生活 30×25／28 頁 創作・漢字
⑯『ろってちゃん』	ディック・ブルーナ／文・絵，まつおかきょうこ／訳	福音館書店	2016 年	肢体不自由者の生活 17×17／26 頁 創作

資料５．その他の身体障害への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容
①『さっちゃんのまほうのて』	たばたせいいち，他／共同制作	偕成社	1985 年	先天性四肢欠陥 27×19／40 頁 半創作
②『チーちゃんのくち』	わたなべまみ／文・絵	口腔保健協会	2005 年	口蓋裂 22×28／32 頁 半創作
③『てるちゃんのかお』	藤井輝明／文，亀沢裕也／絵	金の星社	2011 年	海面状血管腫 24×25／32 頁 半創作
④『神様のプレゼント』	菊武由美子／作，有川朋子／絵	文芸社	2018 年	口蓋裂 19×24／24 頁 半創作・漢字

参考・引用文献

（１）徳田克己：「障害理解絵本における『さっちゃんのまほうのて』の読み聞かせの効果」，『読書科学 38(4)』，153-161 頁，1994 年.

（２）岡山市立図書館:『岡山市立図書館資料収集方針(改訂版)』,11 頁,2004 年. http://www.city.okayama.jp/contents/000182618.pdf(2022 年 11 月 6 日閲覧)

（３）岡山市立図書館：『岡山市立図書館の概要令和 4 年度版』，69 頁，2022 年. https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000009/9006/gaiyou2022.pdf（2022 年 11 月 6 日閲覧）

（４）厚生労働省：『身体障害者認定基準について』，1-2 頁，2008 年. http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/10/dl/s1027-11d.pdf(2014 年8月 24 日閲覧)

（５）望月珠美，徳田克己：「幼児における盲導犬の認識に関する研究Ⅰ：障害理解教育の視点から」,『日本保育学会大会研究論文集(47)』,378-379 頁,1994 年.

（６）望月珠美，徳田克己：「盲導犬およびその使用者に関する理解促進のための障害理解教育教材の作成―絵本『盲導犬とわたし』の作成と評価」，『桐花教育研究所紀要(7)』，41-52 頁，1994 年.

（７）石上智美，富樫美奈子，望月珠美：「幼児に対する盲動犬に関する理解教育：盲導犬使用者は幼児にどのようなことを理解してほしいか」，『日本保育学会大会論文集(55)』，746-747 頁，2002 年.

（８）望月珠美，徳田克己：「マス・メディアが盲導犬に関する認識に与える効果Ⅰ―計量国語学的手法による新聞記事・書籍内容の分析―」，『日本教育心理学会総会発表論文集(43)』，146 頁，2001 年.

（９）白澤麻弓：「一般の人が何をどこまで理解したらよいか２―聴覚障害」，（徳

田克己，他/編著：『障害理解心のバリアフリーの理解と実践』），138-143 頁，誠信書房，2005 年.
(10)白澤・前掲書（９）：141 頁.
(11)富樫美奈子，水野智美，小宮孝司：「子どもは車いす使用者を見たときにどのような反応をするのか」，『実践人間学(5)』，21-23 頁，2001 年.
(12)水野智美：「幼児に対する障害理解指導」，『幼児に対する障害理解指導』，25-26 頁，文化書房博文社，2008 年.

Children’s Books as Teaching Material that Help Preschoolers Gain Understanding of Physical Disabilities

ASANO Yasumasa*1, YAMAGUCHI(NISHIOKA) Yuki*2, BABA Noriko*3

Focusing on children’s books about physical disabilities, this study involved the creation of a list of children’s books following the collection and analysis of children’s books that help preschoolers gain understanding of disabilities. At the same time, the learning elements of those books and the points to note for preschool teachers were discussed. As a result, it was found that there is a wide range of children’s books about physical disabilities depending on the ideas and intentions of the writers; e.g., those that aim to promote emotional understanding, those that focus on gaining knowledge of items that assist the life of children/people with disabilities such as guide dogs and wheelchairs, and those that include both of these themes. In order to effectively utilize such children’s books, preschool teachers must grasp the learning elements of the books, choose the appropriate book according to the target of their disability awareness education, and present the book’s content in ways that will enable the preschoolers to generalize the learnings to their everyday life. In the future, this study will be further developed by collecting cases of disability awareness education using children’s books based on our list and analyzing their educational effects. In addition, any new children’s book about disability awareness will be scrutinized and the list will be updated whenever necessary to enhance its practicality.

Keywords: Preschool period, Disability awareness education, Physical disabilities, Children’s books, Preschool teacher

*1 The Department of Early Childhood Education and Care, Kurashiki City College
*2 MINAN Certified Centers for Early Childhood Education and Care
*3 Faculty of Education, Okayama University